

2010年生活意識調査の概要



豊田 尚吾

Written by Shogo Toyota

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所

研究員

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(以下、CEL)は、今年も「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を1〜2月に実施した。本誌は「現代生活者の住まい・生活観 2010 — 持続可能性と生活満足」と題し、本章では調査結果から得られたデータを、CEL研究員が分析、報告を行っている。

本稿では、それに先立ち、調査方法や問題意識、特徴を明らかにすることで、この調査の全体概要を示すとともに、本章各論考の理解に役立つような情報を提供することを目的としている。

今回の調査の大きな特徴は回答者の補充を行ったことである。本調査は基本的にパネル調査であり、1度回答してくださった方々に、毎年継続してアンケート調査を行っている。これによって、全体の動きだけでなく、「個人」がどのように意識を変化させているかを追跡できるというメリットがある。実際に、昨年の季刊誌「CEL」90号では過去の調査との比較を柱に分析を行った。

一方、パネル調査は、長期間にわたる、回答者の追跡が難しいという問題も持っている。同じ人に回答してもらおうにあたっては、転居や不在といった障害が立ちはだかる。その困難の度合いは年齢層によって異なる。特に若年層は移動が頻繁であり、回答者とコンタクトをとり続けることが難しい。また、当然のことながら、5年経てば26歳の回答者は30歳になり、全回答者を追跡できたとして

も、そのままでは20代前半の回答者はいなくなってしまう。

そのため、第1回調査においては、20代の回答者が全体の11・8%、30代が22・6%、40代が22・0%、50代が23・1%、60代が20・5%とバランスがとれていたのに対し、昨年第5回調査では、20代が5・6%、30代が15・8%、40代が24・0%、50代が24・3%、60代以上が30・3%とかなりいびつになっている。これは3年前の第3回調査において、約5000人の新規回答者を追加したうえでの値である。

このような問題を克服するため、今回の調査では若年層を中心に、新規対象者を392名補充した。それにあたっては、個人情報保護法の運用が厳しくなり、従来の住民基本台帳でのサンプル抽出が困難となっている。そのため、今回からエリアサンプリングという(住宅地図を用いる)方法を利用した。

ここに、今回の調査の問題意識が集約されているといっても過言ではない。すなわち、従来堅持してきた、無作為抽出という中立性を、ある程度あきらめて、若年層の意識データを意図的に多く収集したことが、今回の特徴である。住まい、地域コミュニティ、少子高齢化問題、環境・エネルギー問題、ライフスタイル問題などに関し、世代間の意識がどう違うのか、あるいはどこが同じなのかを検討する。そのことを通じて、次代の持続可能な社会や生活に対するヒントを得ようと試みた。

それが成功しているかどうかは各論考をご覧いただくこととし、本稿では次節より、調査の概要を報告する。

調査方法および回答者の属性

正式名称は「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査(第6回)」であり、「住まい・生活」に関して生活者が抱える現在の問題、期待する姿・方向、そのギャップを埋める解決策、今後のあり方などを分析・研究するための基礎資料とすることを目的としている。本年は1~2月に調査を実施した。同様の調査を2005年から毎年1回ずつ実施しており、今回で6回目になる。2006年の第2回のみ郵送調査で、それ以外は回答者の自宅を調査員が訪問する留置調査である。調査結果の概要、分析は本誌74号、75号、82号、86号、90号などに掲載している。また、調査データや関連論考は、エネルギー・文化研究所のウェブサイトにて公開している(*)。

既に述べたように、本調査の最大の特徴はパネル調査であることだ。第1回調査(2005年)での回答者1034人の回答者に継続して調査を依頼しつつ、回答いただけなくなった方の補充を第3回調査(2007年)で行った。具体的には511名の回答者を新たに追加した。第4回調査、第5回(昨年)調査は、新規の回答者を増やさず実施し、それぞれ964名、860名の回答をいただいた。

今回(第6回)の調査では、回答者に占める、若年層の割合の低下が著しくなったため、無作為抽出という中立性をあきらめ、若年層を中心に回答者の補充を行った。結果、1182人の方々が回答してくださった。時間のない中、毎回回答をしてくださる方々にあらためて感謝申し上げたい。

この結果、回答者の年齢構成は図1のように変化した。内円が昨年調査、外円が今年の調査を表している。20代の回答者の割合が5・6%から18・7%に上昇するなど、各年齢層のバランスが改善

していることが分かる。また男女の構成比も図2のように、ほぼ同数になっている。

また、その結果、回答者属性の顕著な変化として、未婚者の割合が高くなった。昨年、未婚者は全体の12・4%であったが、今年は21・0%となっている。それが主な理由であると思うが、夫婦だけの1世代世帯が18・6%から15・2%に減り、親と子どもの同居を意味する2世代世帯が57・9%から61・5%に増えている。学生の割合も、昨年0・5%から、今年3・5%へと増加している。

このような回答者の属性の変化が、各設問の回答結果にどのような影響を与えるかが、今回の調査分析の見所である。各設問の詳細については各論に委ね、次からは若年層と高齢層との違い、その全体的な傾向を確認する。

ちなみに、パネルという意味では第1回から継続して御回答くださっている方は、男性202名、女性258名の合計460名である。内訳は20代が3・9%、30代15・0%、40代27・2%、50代24・3%、60代以上29・6%である。

第3回(回答者を増やした年)以降の継続回答者は、男性347名、女性443名の合計790名である。内訳は20代が4・2%、30代14・6%、40代23・7%、50代25・4%、60代以上32・2%である。

設問と回答傾向

調査では、若年層を中心に、世代間の差異に注目することで、社会のあり方に対する何らかの気づきを得たいと考えた。その際、各設問の回答結果を考察する中で、単に年齢層別に見るのではなく、性別年齢層別に分けた方がデータの特徴がよく表れる場合がある

図2 回答者の男女構成比(%)

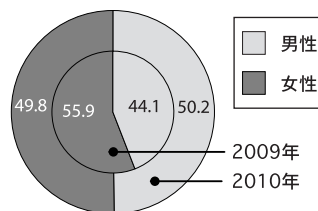


図1 回答者の年齢構成比(%)

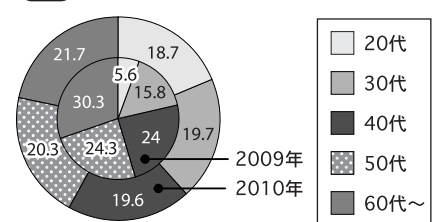


図4 年齢層別家屋所有形態(%)

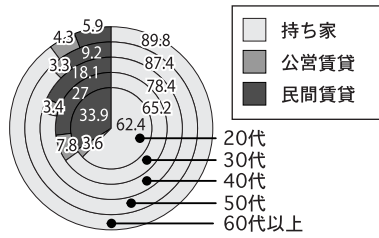
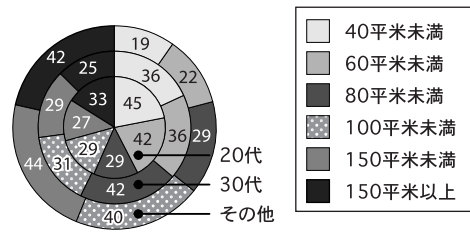


図3 年齢層別住まいの広さ(%)



ことを確認した。

1 住まい、コミュニティ

若年層の住まいの特徴は、当然のことながら、狭いことと貸家が多いことである。ただ、20代と30代を比べると、親と同居している比率が高いのか、150平米以上の家屋に住む割合は、20代の方が30代よりも高い(図3)。

持ち家比率は、年齢層が高くなるほど上昇し、60代以上が89・8%。それに対して20代が62・4%、30代が65・2%となっている(図4)。

住まいに関しての嗜好には年齢層の違いが反映しており、若年層は、血縁にない者が共に暮らすといった、新しい住まい方に抵抗がない、住み替えに抵抗がない、個室を好む、家の中に仕事のスペースを求めない、などという特徴が見られる。

地域コミュニティに関しては男女差が確認できる。自治会活動やまちづくり活動には男女共に若いほど参加者が少ない。祭りやイベントの参加に関しては男女差はないのだが、祭りなどは特に中年の女性の参加率が高い。その分、年代差が女性の方で見られる。つまり、男性よりも女性の中の年代差が大きいという結果になっている。

また、居住地付近に知人がいるか、という質問に対して、若年者は、「いる・いない」で両極に分かれる傾向が見られた。年代差でいうと、これも男性だけだと有意な差異はない。女性は年齢を重ねるほど、地元との交流が深くなっていくことを反映しているようで、

年齢層別の回答に統計的な有意差が認められた。

ただ、今後、地元で知人を増やしたいかという意向については若年者の方が積極的で、特に若年女性はその傾向が大きい。やはり、地域コミュニティ内での交流を、より強く下支えしているのは中年の女性であり、若年の女性もその自覚と意識を持っているようだ。

2 ライフスタイル(食生活・エコライフ)

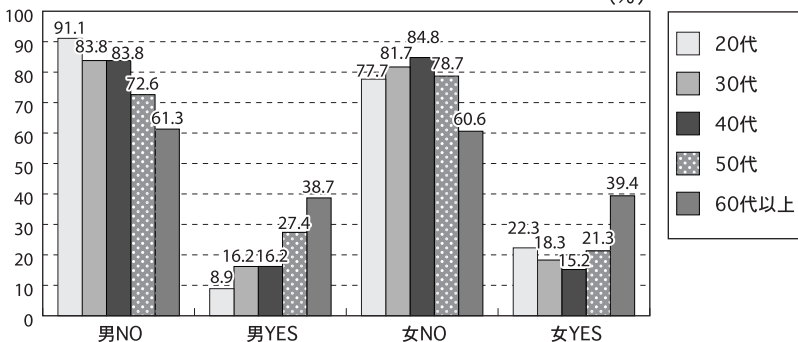
食生活に関しても年代差が見られた。食生活での不満として、栄養のバランスを理由とするものなどは若年女性の関心が高い。食の安全・安心などはむしろ高齢者の関心が高く、若年男性などはあまり気にしない人が多いようである。

調理頻度は若年者が少ない一方で、調理が好きか嫌いか、という質問では、年長者よりも若年者の方が料理好き、と答える傾向が強かった。これに関して、女性については年代で好き嫌いの差があまりないのだが、高齢の男性が調理を好き、と選択する率が非常に少なかった。そのため男性の方で年代差が統計的に有意に現れている。

食事の片付けも調理と同様、男女差が依然として大きい。しかし20代に関しては比較的那の差は小さくなる。とはいえ30代に入ると急に格差が広がっている。したがって、現在20代の人たちが食事に伴う作業を分担する傾向があり、30代になってもこの関係を維持できるはず、とはまだいえない。

エコライフに関しては、基本的に女性、あるいは高齢者の意識が高いという傾向が顕著である。例えば地産地消の実践意向についての回答を見ても分かるように、年代差があるとともに、男女別のパターンの差も著しい(図5)。

図5 地産地消実践の意向 (%)



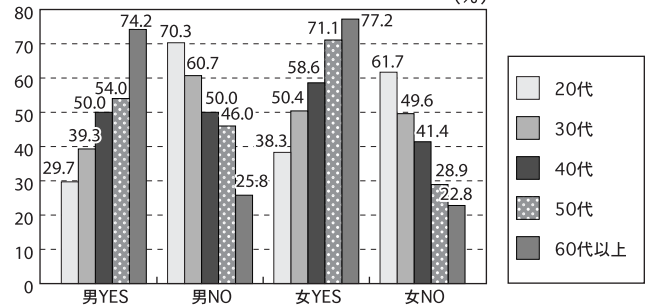
3 社会問題・生活満足

関心のある社会課題について聞くと、全体では「少子高齢社会

性を考えるうえで重要な、家事や仕事の時間を除いた自由時間についても調べた。全ての年代で、「あまりない」「ほとんどない」の合計値は、女性の方が上回っている(図7)。男女とも既婚者の方が圧倒的に時間の不足を感じているが、既婚者の中のどの年代でも女性の時間不足感が男性より大きい。家事等の負担が女性に偏った結果、女性の自由時間のなさが際だっているのかもしれない。

ただ、20代に関しては、既婚者の割合が少なく(男性20%、女性33%)、むしろ未婚女性の時間不足感が未婚男性より顕著に大きい。結果として男性との差が最も大きい年齢層となっている。これは家事以外の活動の結果と理解すべきであり、若年女性のライフスタイルを、より精査することの必要性を示唆している。

図6 環境に配慮した生活を送っているか (%)



つまり、男性の場合には年齢層が高まるほどエコ意識も高まる傾向がある。一方、女性の場合には60代以上の意識は非常に高いが、それ以下は似たような水準となっている。とはいえ、若年女性の水準も男性と比べるとかなり高い。

また、環境に配慮した生活を送っていると思うか、という質問を行った。それに対する回答が図6である。男女とも年齢と環境配慮自意識が並行して変化している。絶対的な水準を見ると、女性の意識の高さが際だっている。

次に、ワークライフバランス

問題(全体の51.5%が選択)、「生活・暮らし向き問題(48.8%)」、「地球環境問題(47.7%)」、「雇用問題(47.2%)」と続く。一方、20代の関心事は、圧倒的に「雇用問題」であり、男性で58.4%、女性で63.3%もの回答者が選択している。一方、30代以降になると、雇用問題への関心は一気に平均的な水準に収斂していくことから、やはり身近で切実な問題が20代の意識に大きな影響を与えていることが理解できる。

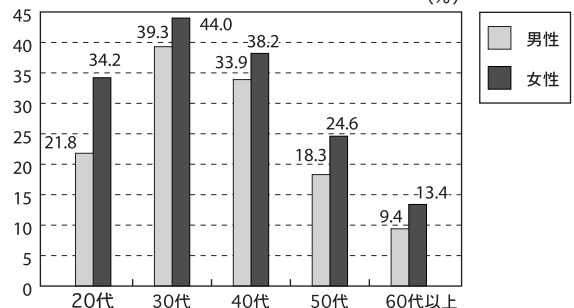
30代以降は社会問題への関心は平均値に近くなっていくが、若年の女性の関心事としては、教育問題が高い選択率となった。これも子どもに大きな影響がある問題だという理由で選択されたのだろう。

社会貢献のために取り組もうと強く思う項目を聞いた場合でも、「子どもを育む」ことをあげた回答者が30代の男性(46.2%)、20代、30代女性(それぞれ46.7%、57.8%)と非常に多かった。生活の中で、子育てにエネルギーを費やしている実態がうかがわれる結果である。

そのような中、生活の満足度はどのようになっているかという点、総じて男性は50代、女性は40代を中心に、相対的に不満足が高く、若年層、60代以上層は比較的高いというデータが得られた。若年層と60代以上層の違いは、前者は不満層も多いが後者は少ないということである。また、平均的には女性の方が男性よりも満足度が高い、ということがいえる。これらは安定して見られる傾向なので、40代、50代に負荷がかかる社会の構造となっているのかもしれない。

ただ、生活満足度と似たような概念であるが、「あなたは幸せかどうか」と聞くと少し状況が変わってくる(図8)。男性の場合、幸せと答えた割合の合計値は40代がピーク、一方で、女性の場合、

図7 自由時間があまりない、ほとんどない (%)



40代”以外“は総じて高水準である。男性50代、女性40代に幸せ感が少ないのは生活満足度と整合的であるが、男性40代などは、生活満足度はそれほど高くないが、幸せ感が高いところが興味深い。

考察

若年層を中心に、性別も加味しながら年代別の特徴を見てきた。個別項目の詳細な分析については後の論考に譲るが、今回の調査の全体像を取りまとめてみたい。一つの気づきとして、若年から高齢者まで、順番（一直線）に意識が変わるというよりも、若年、中年、高齢者で異なった動きをする意識項目が少なからずあったということ、あるいは男女という性別が非常に大きな影響を与える場合も多く見られたことがある。

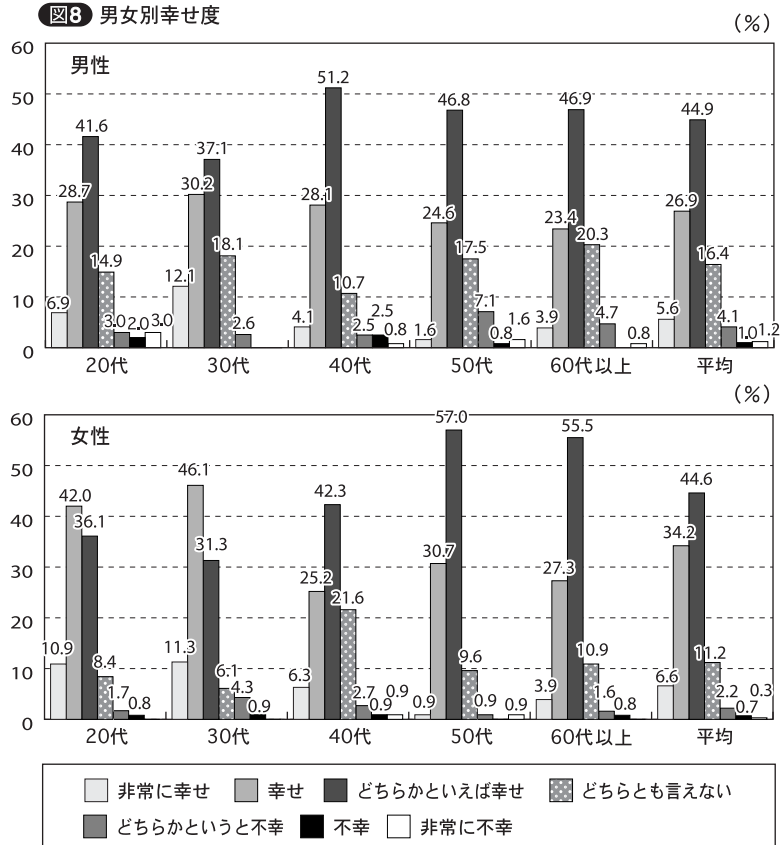
当然のことながら、生活者は自身に身近な、あるいは切実な問題に対する関心が高く、若年者では雇用問題、教育問題といった項目が、特に注目されていることが確認できた。一方で社会に対する貢献という点では「子育て」が大きな意味を持つことも分かった。

公的な社会課題に対しては、高齢層の意識の高さが際立った。やはり次世代に社会をバトンタッチするという意味での責任意識が高く持たれているためではないだろうか。そのような課題の中、環境問題に関しては、特に女性の意識は高く、若年者も相対的に高い水準の関心が認められた。

若年者の男女でいえば、生活面での違いとして、女性の方が食や子育てに携わる機会が多い。良い悪いは別として、現実として女性には日常的に環境問題や教育問題に対する関わりの方が大きいといえる。このようなライフスタイル上の行動パターンの違いが、社会的な課題に対する意識の違いとなって、現れているのではないだろうか。

男性も、抽象的な社会課題に対する関心や理解はあるものの、実践的な行動を行っているかという問いに対しては、女性に及ばないことが多い。それだからといって、短絡的に、今後は女性的感

図3 男女別幸せ度



覚が必要と結論付けるのではなく、そこから新たな仮説を導き検証するという態度を持ちたい。例えば、先で述べたような男性と女性のライフスタイルの違いなどが影響しているのではないかとといったことである。

以上、簡単に今回の調査の方法、問題意識、概要を述べてきた。より一般的な概要については、季刊誌「CEL」93号でも紹介している。個々の調査結果についても、あわせてご覧いただければ幸いである。

CEL

(※) <http://www.osakagass.co.jp/company/efforts/ce/ife/index.html>